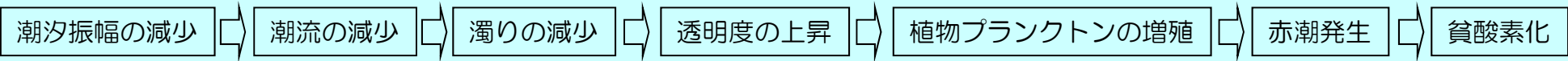


環境省の調査では、有明海環境悪化の要因とされてきた潮汐振幅の減少は月の引力の影響を受けて起きており、潮受堤防締切の影響は小さい。

1 有明海の異変は、以下のスパイラルによって発生すると考えられていた。



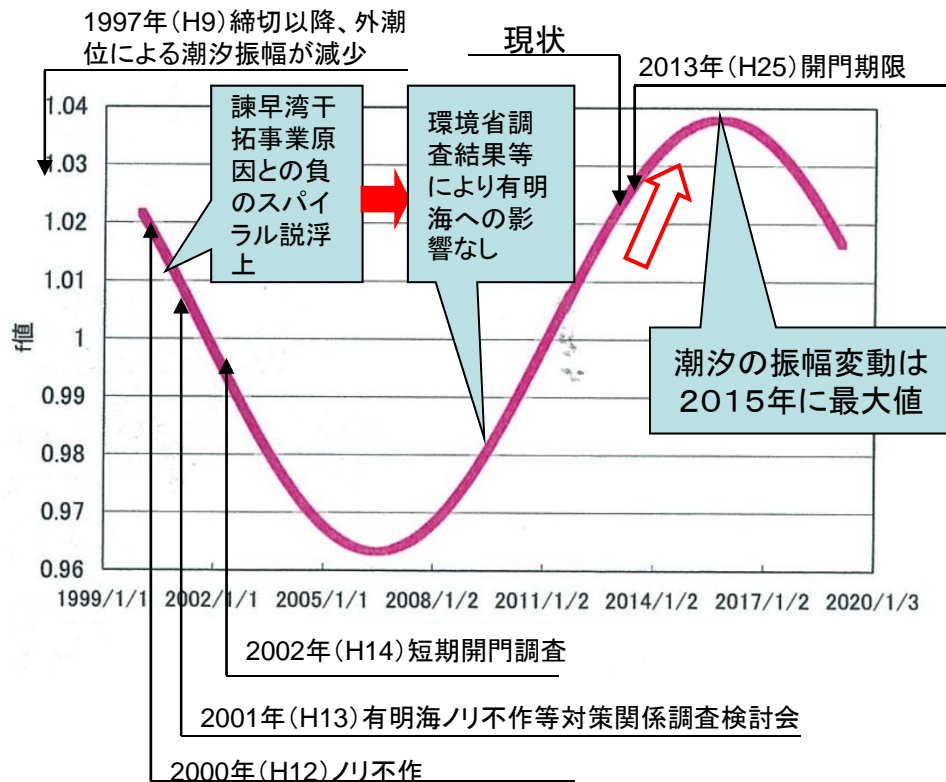
2 ところが、アセス準備書では、有明海の再生にはつながらない結果。

3 環境省が行った「有明海貧酸素水塊発生シミュレーションモデル調査業務」（平成19年度～平成21年度）によれば、潮汐振幅の増減は、月の18.6年周期の昇交点運動（月の引力の変化）の影響を受けており、潮受堤防締切の影響は小さい。

4 開門しなくても今後2015年に向けて潮汐振幅が増大し、これに伴い、有明海湾奥の貧酸素化が緩和されると示唆。

月の昇交点運動の自然現象

図-1 潮汐の振幅変動



有明海の再生（有明海湾奥の貧酸素緩和）

開門不要

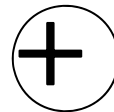
図-2 月の昇交点運動に伴う最大潮汐振幅値の変化による貧酸素水塊への影響

モデル調査では、何もなくても2015年に向けて潮汐振幅が増大し、貧酸素が改善（2015時点の計算値）

- 溶存酸素は、沖側(P1、P6)で1.0[mg/L]上昇、干潟辺部(T1、T2、T14)で2~3[mg/L]上昇。
- 基準点P1、P6、T1、T2、T14における底層DO3 [mg/L]以下の累積時間は、11~210時間減少、最大継続時間は4~83時間減少。
- 基準点P1、P6、T1、T2、T14における有明海湾奥部底層DO3 [mg/L]以下の総面積は、22.2~34.7%減少。



2015年以降の数年間は、潮汐振幅が増大するため、あわせて有効な施策を実施すれば、湾内の物質循環を貧酸素化を起こさない“正のスパイラル”に乗せられる可能性が高い。



開門より、効果がある水産振興を重点実施
 （日本一の小長井牡蠣の生産振興、大型種苗の放流による回収率の向上等）